

# FLORA KANAGAWA

Jan. 10. 2000 No. 49

神奈川県植物誌調査会ニュース第49号

〒250-0031 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail katsu@pat-net.ne.jp

郵便振替 00230-5-10195



ミヤマシグレ。詳しくは本文568ページ参照。

佐々木あや子:ヨツバハギ, 神奈川県に分布を確認 .....	564
佐々木あや子:ハクモウアカツメクサとジモグリツメクサ .....	564
勝山輝男:神奈川県植物誌備忘録(2) .....	566
勝山輝男:イヌホオズキ類の検索 .....	570
高橋秀男:先人の標本をたずねて(2) .....	571
高橋秀男:昭和9年に見た天神島の植物 .....	572
小原 敬:植物分類群とその語尾 .....	572
高橋秀男・山口勇一:宮ヶ瀬のヒメウラジロとナタネタピラコ .....	573
高橋秀男・林辰雄・金子紀子:本州新産の帰化植物, タマザキフタバムグラ .....	574
木場英久:サガミメドハギ .....	574
菅澤桂子:ミヤマイラクサ .....	575
勝山輝男:植物誌分布図集の訂正及びデータチェックが必要な標本データ .....	576
事務局:不正データの修正作業 .....	577
事務局:2000年度総会のお知らせ .....	578

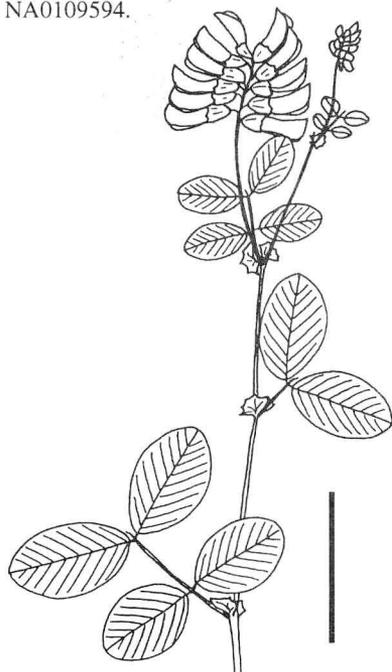
## ヨツバハギ, 神奈川県に分布を確認

(佐々木あや子)

オオバクサフジの標本を調べていたら、まきひげのない標本がでてきた。小葉の数は4-6枚、先端はまきひげでなく突起状になっている。托葉の形もオオバクサフジとは異なるため、調べてみたところ、神奈川県では新産のヨツバハギ *Vicia nipponica* Matsum. であった。帰化植物の話題で賑わっているマメ科植物のなかで、1988年以降の貴重な自生種の新記録となった。

ヨツバハギはソラマメ属の1種で低山地や山麓の草地に見られる多年草。小葉の数や形、大きさがオオバクサフジと似ている。そのためオオバクサフジに誤認していたものと思われる。北海道から九州まで分布するというので、どこにでもある種かと思っていたが今まで記録されていない。以下、標本に基づいて特徴を記しておく。

葉は4-6枚の対生する小葉からなり、先端は小突起となる。小葉は両面無毛で幅1-2.2cm、長さ1.5-3.5cm程、質はやや硬く、脈が目立つ。托葉はやや大きく、半切卵形で歯牙がある。花序は長さ3-4.5cm。花柄は長さ2-3cm、10-12花を密につける。花は青紫色、長さ約12mm、萼は斜形、長さ約5mmで、まばらに毛がある。萼裂片は広三角形で、長さ1mm以下。標本: 足柄上郡松田町 1988.6.25. 城川四郎 KPM-NA0109594.



ヨツバハギ. スケールは3cm.

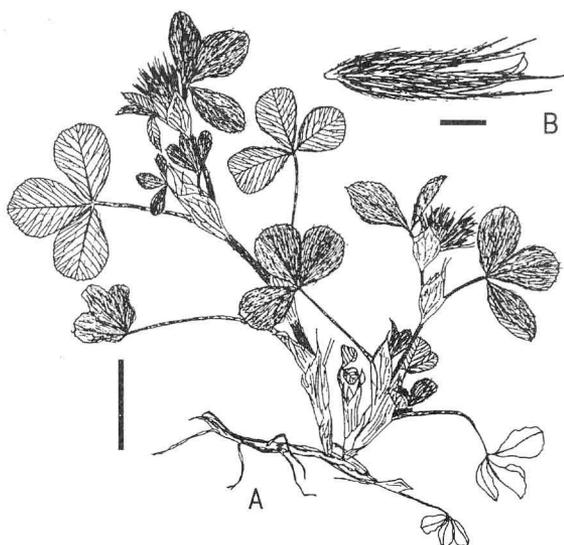
## ハクモウアカツメクサとジモグリツメクサ

(佐々木あや子)

ハクモウアカツメクサ (新称) *Trifolium striatum* L.

Flora Kanagawa (34): 372でピロードアカツメクサ *T. hirtum* Au. として報告された個体は、小葉の形、全草が白毛で覆われることなどがピロードアカツメクサに似ているものの、全体の大きさ、毛の形態、萼や花卉の形などが異なる。そこで、Zoharyほか(1984)などの海外の文献に当たってみた。その結果、ヨーロッパ、中東、アフリカ北部などに分布し、路傍、荒地、牧場などに見られる *T. striatum* L. であることが判明した。葉の裏に白く長い毛が密生するので、和名をハクモウアカツメクサと新称し、報告する。以下に標本にもとづく特徴を記す。

1年草、まれに2年草。高さ約5cm。全体に長軟毛が密生する。下方の葉は長さ2cmの柄があり上部のものはしだいに柄が短くなる。茎は白色で上向きに寝た毛が密生する。托葉は卵形で半分ほどが柄につき、先は尾状に伸び、緑白色膜質、緑色の脈が目立ち、まばらに長毛がある。葉は掌状3出葉。小葉は倒卵形、長さ8mm、幅6mmで、上部の縁にはまばらに浅い鋸歯があり、側脈は葉縁に達する。葉の上面には長軟毛がまばらにあり、下面には長軟毛が密生する。花序は葉腋につけ、無柄、直径約5mm、多数の花をつける。萼は筒部



ハクモウアカツメクサ. A: 植物体(スケールは1cm), B: 花(スケールは1mm).



ジモグリツメクサ。A-D:花序, E:花, F:果実, G:植物体。スケールはA-Fは2mm, Gは5cm。花は咲き始めには斜上しているが(A), やがて下を向き(B), 花序の先端から不稔の花の萼筒が伸び始め(C), やがて萼裂片が開出し, 果実が熟す頃には, 不稔の花の萼筒に包まれる(D)。

の長さ約1.6 mm, 10脈がある。萼歯は5個で、長さ3 mm, 先は鋭く尖り、長毛に覆われる。花冠は淡紅色で萼よりも短く、長さ4.5 mm。豆果に種子は1個。

標本: 横浜市西区楠町 1992.5.7. 吉川アサ子 KPM-NA1104621.

ジモグリツメクサ *Trifolium subterraneum* L.

吉川アサ子さんが採集され、Flora Kanagawa (34): 372で報告されたジモグリツメクサ *T. subterraneum* L. の標本を見たところ、長田(1972)の *T. subterraneum* とは、葉柄が4~6 cmと短いこと、全株に白色の毛があること、種子は萼に3分の2以上覆われていることなどの点で異なることがわかった。文献によれば、本種は非常に多形でいくつかの変種が記載されており、神奈川県で採集されたものはそのうちの、var. *brachycladum* L. とと思われる。また、長田(1972)のジモグリツメクサの図も基準変種 var. *subterraneum* そのものではないと思われる。しかし、日本で採集された標本の数は少なく、ここでは、両者も含めてジモグリツメクサ *T. subterraneum* L. として扱う。

標本: 横浜市西区楠町 1992.5.4. 吉川アサ子 KPM-NA104619.

文献

Zohary, M. and Heller D., 1984. The Genus *Trifolium*. The Israel Academy of Sciences and Humanities, Jerusalem.

長田武正, 1972. 日本帰化植物図鑑. 北隆館

---

---

## 神奈川県植物誌備忘録(2)

(勝山輝男)

前号に引き続き、新産地情報を書き記す。

アメリカヤガミスゲ (仮称) (カヤツリグサ科)

*Carex brevior* (Dewey) Mackenzie

川崎市麻生区で平川恵美子さんがヤガミスゲに似た不明のスゲ属植物を採集された。北アメリカのスゲ属を調べてみたところ、*C. brevior* の記載や図と一致した。和名はアメリカヤガミスゲと仮称して処理した。標本は2点あり、1点を川崎市青少年科学館、1点を県博に収めた。詳細については神奈川自然誌資料(21)に投稿した。

セイヨウハマアカザ (仮称) (アカザ科)

*Atriplex patura* L. ?

先日配布された神奈川県植物分布図集1999のP.109にセイヨウハマアカザ *A. patura* の分布図が

出ている。*A. patura* はヨーロッパに産し、北アメリカに帰化している種類で、日本の海岸砂地に自生するハマアカザ *A. subcordata* Kitag. に対応する種類である。座間市の牛糞を撒かれた畑地で松本雅人さんが採集されたもの(座間市小池東原 1998.08.21 KPM-NA0115687)が、*A. patura* と思われるが、果実が未熟で、ヨーロッパ産のものとの比較は十分には行っていない。葉は日本産のものよりも細長く、質もやや薄いので、とりあえず *A. patura* と判断した。今後、よく生育したものが採集されれば明らかになるものと思われる。

ヒロハヒメハマアカザ (アカザ科)

*Chenopodium pratericola* Rydb.

前号で報告したヒメハマアカザ *C. leptophyllum* Nutt. に似た種類で、松本雅人さんが横浜市瀬谷区で採集された(瀬谷区上瀬谷 1999.06.26 KPM-NA0115688)。葉は幅が広く、長さ2~4 cm, 幅5~10 mmで、3主脈を有する。果被はとれやすく、すぐに光沢のある種子が顔を出す。種子の直径は約1.2 mm。ヒメハマアカザは葉が細く1主脈しかなく、種子は果被がとれにくく、直径0.8 mm弱である。浅井(1973, 植物研究雑誌, 48:67-72)は、ヒメハマアカザの変種 *C. leptophyllum* var. *oblongifolium* Rydb. としてヒロハヒメハマアカザの和名をつけているが、その論の中では細分せずにヒメハマアカザに含めるものとしている。しかし、葉の幅だけでなく種子の大きさや果被の取れやすさも異なり、別種として扱うのが適当と考える。

アカザカズラ (ツルムラサキ科)

*Boussingaultia cordifolia* Ten.

南アメリカ熱帯原産のつる性多年草。久内(1950, 帰化植物)に「明治末期に横浜、三浦半島、七里浜に逸出」とあり、長田:日本帰化植物図鑑(北隆館)には「日本の暖地に帰化、神奈川・兵庫・山口・福岡・長崎・熊本などの諸県から記録されている」とある。最近の調査では採集されていない。神奈川県植物誌1988では文献記録を見逃し、採録できなかった。横須賀市博あたりに証拠標本が残されている可能性がある。今回もツルムラサキ科は執筆者も決めておらず、再び見逃すところであった。

ナガエコミカンソウ (トウダイグサ科)

*Phyllanthus tenellus* Roxb.

トウダイグサ科を専門とする福島大学の黒沢高秀氏により、神奈川県植物誌1988でキダチコミカ

ソウ *P. niuri* L. subsp. *amarus* Leandri とした植物は、インド洋のマスカレーン諸島原産の *P. tenellus* Roxb. であることが判明し、ナガエコミカンソウの和名が与えられた。植物誌1988では鎌倉で高さ10 cmの貧弱な個体が1個体採集されただけであった。その後、ぼつぼつと数ヶ所で採集されたが、最近各地から報告がある。基部が木化し、高さ50 cm近くになること、雌花に柄があることから、キダチコミカンソウと誤同定してしまった。しかし、キダチコミカンソウの雌花の花柄が2 mm程度なのに対して、*P. tenellus* の雌花の柄は5~8 mmある。黒沢氏によると本州各地でキダチコミカンソウとされていたものは、ナガエコミカンソウであったという。先日配布された神奈川県植物分布図集ではキダチコミカンソウの標本はすべてナガエコミカンソウとして分布図を作成した。

ナツツバキ (ツバキ科)

*Stewartia pseudocamellia* Maxim.

1999年6月8日に木場さんと山北町の大棚の頭から菰釣山を往復した。その際に鹿の子模様には滑らかに樹皮がはげた高木が何本かあった。ナツツバキと思われるが自信がもてない。ナツツバキは林ほか(1961, 丹沢山塊植物調査報告書)では主稜線にあるように書かれているが、1997年の丹沢大山自然環境総合調査報告書では疑問としている。今年、もう一度現地を確認したい。

標本: KPM-NA0115338, KPM-NA0115343

コメバミソハギ (ミソハギ科)

*Lythrum hyssopifolia* L.

熱帯アメリカ原産の帰化植物で1年草。綾瀬市(嫁久保 998.06.25 松本雅人 KPM-NA0113414~7, 同 1998.10.05 松本雅人 KPM-NA0112976)や横浜市西区(北幸町 1999.05.26 吉川アサ子 KPM-NA0116426~7)で採集された。神奈川県からははじめての記録と思われる。これまでに長野、愛知、三重、岡山などから報告があり、長田:原色日本帰化植物図鑑(保育社)P.183に図が載っている。先日配布された神奈川県植物分布図集にはすでに分布図が載っている。

コバンコナスビ (サクラソウ科)

*Lysimachia nummularia* L.

ヨーロッパ原産の多年草。別名ヨウシュコナスビ、イエローリシマキア。座間市小池東原の遊水池で松本雅人さんが採集された(1999.06.04 KPM-NA011708)。村田(1979, 植物分類地理

30:64)が北海道夕張市への帰化を報告し、コバンコナスビと和名を新称している。グランドカバーやアクアリウムの水草として栽培され、小学館園芸植物大辞典 I のp.392に簡単な解説とカラー写真が出ている。以前と同じ栗原遊水池で採集されたものが相模原市博物館にあり、それにはアクアリウムの水草を扱った本に出ていたイエローリシマキアの和名をつけてしまった。分布図集にもイエローリシマキアの和名ですでに分布図が載っている。葉は対生し、楕円形で先は円く、長さ約1 cm、2~5 mmほどの短い葉柄がある。花は葉腋につけ、1~2 cmの柄があり、黄色で直径約1.5 cm。ハマワスレナグサ (ムラサキ科)

*Myosotis discolor* Pers.

ヨーロッパ原産の帰化植物で、1年草。高さ10~20 cmと小形で、花は黄色から淡青色に変わる。1998年4月5日に吉川アサ子さんが鶴見区大黒ふ頭で採集された(KPM-NA0107887)。その後、横浜市青葉区でも採集されている(あざみ野南 1998.04.16 北川淑子 KPM-NA0115582)。神奈川県への帰化の記録ははじめてと思われる。大正時代に新潟県ではじめて記録され、その後、近畿地方などから帰化が報告されている。長田:原色日本帰化植物図鑑(保育社)P.148, 長田:日本帰化植物図鑑(北隆館)P.80に図が載っている。先日配布された神奈川県植物分布図集にはすでに分布図が載っている。

アレチウシノシタグサ (仮称) (ムラサキ科)

*Anchusa arvensis* (L.) M.Bieb.

川崎市麻生区黒川で平川恵美子さんが、不明のムラサキ科植物を採集された。全体の形はワルタピラコ *Amsinchia lycopsoides* Lehm. に似ているが、花冠が青色で、分果の形が異なっているので、別の属と考え、ヨーロッパの植物誌にあたってみた。その結果、ウシノシタグサ属の *Anchusa arvensis* と判明した。和名をアレチウシノシタグサと仮称し、整理することとした。標本は2点あり、1点を川崎市青少年科学館、1点を県博に収めた。詳細については神奈川県自然誌資料(21)に投稿した。

モナルダ・モリス (シソ科) *Monarda mollis* L.

FLORA KANAGAWA (48)でモナルダ・デイスベルサ *M. dispersa* Small. について報告したが、同属の別の植物が、松本雅人さんにより、横浜市瀬谷区の路傍で採集された(上瀬谷 1999.07.02 KPM-NA0115692)。高さ10 cmほどの貧弱な1個

体のみであったが、調べたばかりだったので、*Monarda*属とすぐにわかった。花序が茎頂に一つしかつけないこと、萼に毛が多いことなどから *M. mollis* と判明した。栽培されていたものが逃げ出したものか、随伴して持ち込まれたものかは不明である。モナルダ・ディスベルサにしろ、本種にしろ、調べた範囲では、栽培の記録は見当たらない。わずかに1個体のみではあるが、記録にとどめておきたい。

サルビア・ブラテンシス (シソ科)

*Salvia pratensis* L.

北川淑子さんが横浜市青葉区的路傍で採集された(あざみ野南 1999.05.18 KPM-NA0115689)。ヨーロッパ原産の多年草。セージに近い種類なので、ハーブとして導入されたものが逃げ出した可能性が高いと思われる。

トマトダマシ (ナス科) *Solanum rostratum* Dunal

北アメリカ原産の帰化植物で、1年草。全体に刺と星状毛が密生する。花は黄色で雄しべ5本のうち1本だけが他より長い。座間市や横浜で相次いで採集された。神奈川県からははじめての記録と思われる。長田:日本帰化植物図鑑(北隆館)P.66に図が載っている。先日配布された神奈川県植物分布図集にはすでに分布図が載っている。標本:座間市小池東原 1998.05.27 松本雅人 KPM-NA0108375, 横浜市都筑区茅ヶ崎南3丁目 1999.07.01 吉川アサ子 KPM-NA0115461, 横浜市青葉区恩田町 1999. 高橋多枝子 YCB-未登録

ウェロニカ・テウクリウム (ゴマノハグサ科)

*Veronica teucrium* L.

北川淑子さんが横浜市青葉区的路傍で採集された(あざみ野南 1999.05.08 北川淑子 KPM-NA0115691)。ヨーロッパ原産の多年草で、総状花序に青紫色の直径1cm弱の比較的きれいな花をつける。園芸用に導入されたものが一時的に逃げ出したものか、それとも随伴して持ち込まれたものかは不明である。園芸店で販売されていれば、一時的な逃げ出しと考えたい。

ツノゴマ (ツノゴマ科)

*Proboscidea louisianica* Thell.

1993年に県立歴史博物館の民族担当学芸員の長田平さんが、山北町向原(YA-8)の畑に発生したツノゴマを持ってこられた。標本が県博に収められているので、神奈川県植物分布図集1999にも

分布図は出ている。しかし、これまでに記録のなかった科のために執筆者も決められていない。植物誌2001では忘れ物にたくないの、備忘録として記しておく。標本:KPM-NA1106134, KPM-NA1106325

ハシカグサモドキ (アカネ科) *Richardia scabra* L.

熱帯アメリカ原産の帰化植物で、山本絢子さんが大磯町で採集された(大磯浅間山下 1999.09.01 KPM-NA0116543)。長田:日本帰化植物図鑑(北隆館)P.52に図が載っている。大磯で採集された標本はこれよりもやや葉柄が長いのが疑問であるが、ハシカグサモドキと同定した。神奈川県植物誌(1958)では二宮に記録があるが、神奈川県植物誌1988では採集されなかった。

ミヤマシグレ (スイカズラ科)表紙写真参照。

*Viburnum urceolatum* Siebold & Zucc.

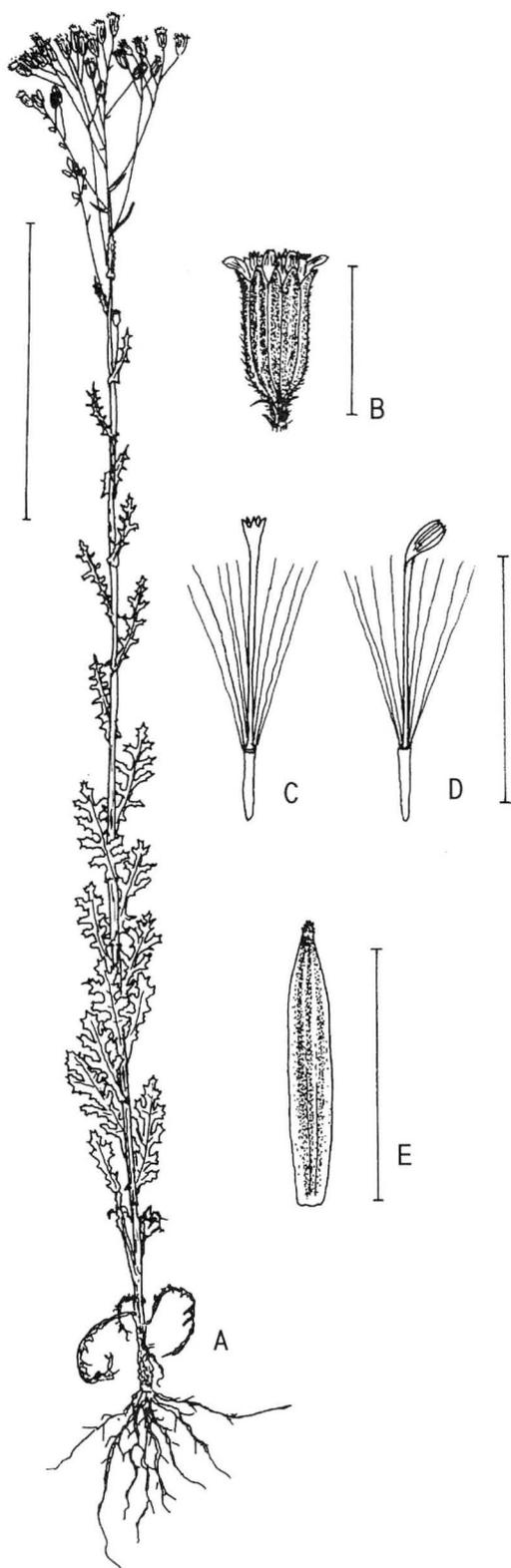
form. *procumbens* (Nakai) H.Hara

1999年7月7日に蛭子さん、支倉さんと金時山の南足柄市側の上部を調査した。その際にミヤマシグレを見出した。岩尾根で数株が見つかったが、花をつけた形跡のあるものはなかった。その後8月4日に南足柄市担当の菊池さんと、再度金時山を調査したが、その際には隣接する岩尾根でさらに数株が見出され、果実のついた株も採集することができた。神奈川県植物目録(1933)に箱根・塔ヶ岳・丹沢山・蛭ヶ岳、神奈川県植物誌(1958)に箱根・丹沢等の記録があったが、標本が確認できず、神奈川県レッドデータ生物報告書(1995)では消息不明種として取り扱った。今回、箱根での生育が確認できたが、丹沢でも丹沢山から犬越路にかけての北面の樹林に被われた岩場などを探せば、見出される可能性がある。標本:KPM-NA0115487, KPM-NA0115566

アレチボロギク (仮称) (キク科)

*Senecio sylvaticus* L.

北川淑子さんが横浜市青葉区で採集された(あざみ野南 1998.06.07 KPM-NA0115690)。ヨーロッパ原産の1年草。上記の和名を仮称して整理することとした。よく調べていないが、日本新産の可能性が高い。全体はノボロギク *S. vulgaris* L. に似ているが、きわめて短い舌状花がある。舌状部分はきわめて短く1~2mmしかない。似たものではネバリノボロギク *S. viscosus* L.の帰化の記録(浅井, 1995. 植物研究雑誌, 70:235-238)があるが、これは全草に顕著な腺毛が密にあり粘るので異なる。



アレチボロギク。A:植物体,B:頭花,C:管状花,D:舌状花,  
E:総苞片。スケールはAが10cm, B-Eが5mm。

### Senecio 属の未同定2種 (キク科)

前種は比較的すんなりと納得するものが見つかったが、*Senecio*属は全世界に多くの種があり、似たものも多く、原産地・学名不詳になりやすい。手元にも横浜市中区新港埠頭のものと同見区大黒埠頭の2種の原産地学名不詳の*Senecio*属がある。新港埠頭のは1990年頃に吉川アサ子さんと同見埠頭を歩いたときに、道路と資材置き場の間で見出したもので、その後、吉川さんにより1994年位まで生育していたことが確認されている。大黒埠頭のは海釣公園あたりで吉川さんが見出したものである。どちらも茎全体に線形の葉をつけ、黄色の舌状花をもち、よく似ているが異なるものである。植物誌の執筆がはじまり、いつまでも未決の山に埋もれさせておくわけにはいかないので、それぞれシンコウサワギク *S. aff. douglasii* (標本: KPM-NA0115810他)、ダイコクサワギク *S. aff. madagascariensis* (標本: KPM-NA0115808他)と仮の名をつけてコンピュータにデータ登録し、県博の標本庫に収めた。

シンコウサワギクやダイコクサワギクに似たものは、浅井(1995, 植物研究雑誌, 70:235-238)がマツバサワギク *S. blochmaniae* E.L.Green, 関西でナルトサワギク(コウベギク) *S. aff. inaequidens* DC. が報告されている。北アメリカ西海岸の植物誌を見ると *S. blochmaniae* の総苞片は約13個とあるが、シンコウサワギク、ダイコクサワギクともに総苞片は20個以上あるので異なる。ナルトサワギクについては兵庫県植物誌研究会の水田三雄氏、近畿植物同好会の植村修二氏に標本を見ていただいたところ、シンコウサワギク、ダイコクサワギクともにナルトサワギクとは異なるものご教示をいただいた。あわせてナルトサワギクの標本も数点寄贈いただいたので、比較してみたところ、どちらかというダイコクサワギクがナルトサワギクに似るが、ナルトサワギクの総苞の方が小形で、葉の性質も少し異なっている。

シンコウサワギクは、多年草で、基部が木化し、葉は長さ3~8 cm, 幅2~5 mm, 分裂せず、頭花の総苞片は20個ほどある。北アメリカ西海岸の *S. douglasii* DC. あたりがもっとも近い。しかし、シンコウサワギクの葉は全縁でほとんど分裂しないのに対して、*S. douglasii* の葉は普通は裂片が出るとされる。全体としては *S. douglasii* に似ているが、びたりとは一致しない。

一方、ダイコクサワギクの方は基部まで採集されておらず、多年草か一年草か判断がつかない。葉はシンコウサワギクよりもやや幅広く、長さ3~8 cm、幅5 mmほどで、分裂せず、縁には不明の鋸歯があり、基部は半ば茎を抱く。頭花はシンコウサワギクと同じ位の大きさで、総苞片の数も変わらない。1年草であれば、南アフリカ原産でオーストラリアに帰化している *S. madagascariensis* Poiret に似ているが確認はもてない。

## イヌホオズキ類の検索

(勝山輝男)

これまでに集めた文献の情報、標本の情報、生植物の観察からイヌホオズキ類については、次のように整理してみた。和名のあるもの、標本が採集されているものについてキーを作成した。ま

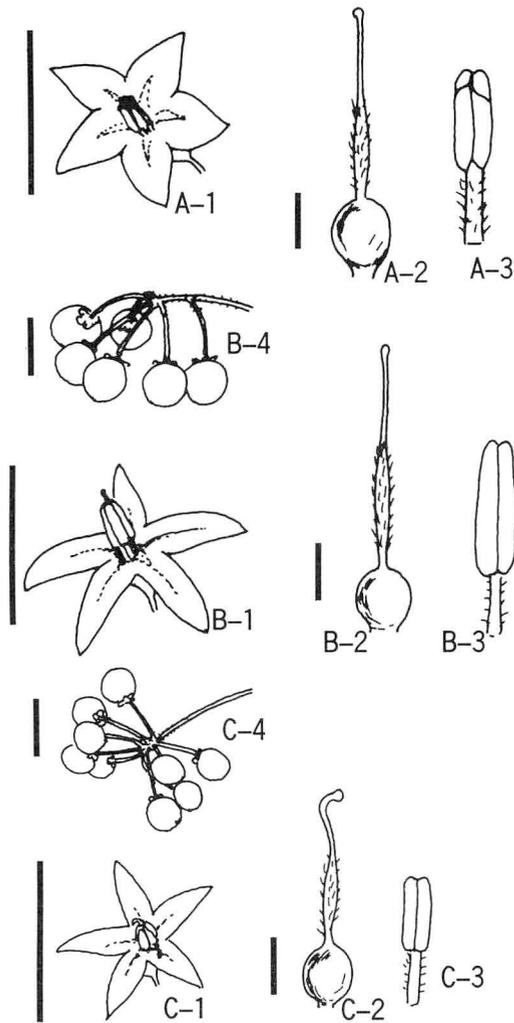
だ検証が足りないが、とりあえず、これで標本を分けてみたところ、80%位はうまく分けられた。尚、キーの後ろの( )内は確認のための形態の記述である。

腺毛のあるものはケイヌホオズキ *S. sarrachoides*, *S. physalifolium*, *S. villosum*, *S. nigrum* ssp. *schultesii* があり、果実がなければ、判断は難しいが、*S. nigrum* subsp. *schultesii* 以外は花序の花数が1~5個と少ない。県内標本に含まれていたピロードイヌホオズキ?はいずれも果実が稔っていないが、花序の花数から *S. nigrum* subsp. *schultesii* と判断した。いまのところ県内標本にはピロードイヌホオズキもアカミノイヌホオズキも含まれていない。

レクタタイプの選定により、北アメリカでそれまで *S. americanum* とされていたものは *S. ptycanthum* で、*S. nodiflorum* とされていたもの

### イヌホオズキ類の検索表

- A. 花後、萼が伸長して果実の半ば以上を被う。(果実は球形で、緑~黒緑色に熟し、球状顆粒を含む。葉や茎には著しい腺毛がある。花序に花は1~5個)
- B. 萼は果実と同長。1果実中の種子は50以上 ..... *S. sarrachoides* ケイヌホオズキ
- B. 萼は果実の半長。1果実中の種子は40以下 ..... *S. physalifolium*
- A. 花後、萼は伸長しない
- B. 果実は縦に長い楕円体で、黄色~赤色に熟す(球状顆粒は含まない。花序に花は1~5個)
- C. 腺毛がある ..... *S. villosum* subsp. *villosum* (= *S. luteum* subsp. *luteum*) ピロードイヌホオズキ
- C. 腺毛はない ..... *S. villosum* subsp. *miniatum* (= *S. luteum* subsp. *alatum*) アカミノイヌホオズキ
- B. 果実はほぼ球形で、紫~黒色に熟す
- C. 花冠は基部まで切れ込まず、裂片は巾広い。種子は長さ約 2mm (花冠は直径8~12mm、葯は長さ2~3mm、花柱は長さ4~6mm。花序はやや総状で5~12花。果実は直径7~10mm、黒色に熟し、光沢は鈍く、果実に球状顆粒は含まない。1つの果実中に種子は30~60個)
- D. 葉や茎に腺毛はない ..... *S. nigrum* subsp. *nigrum* イヌホオズキ
- D. 葉や茎に腺毛がある ..... *S. nigrum* subsp. *schultesii*
- C. 花冠は基部近くまで切れ込み、裂片は巾狭い。種子は淡黄褐色で長さ1~1.5mm (茎や葉に腺毛はない)
- D. 果実は直径7~10mm、黒色で光沢がやや鈍く、よく熟すまでは果肉は緑色。1つの果実中に種子は60~120個、球状顆粒は4~10個。種子は淡黄褐色で直径1~1.3mm
- E. 1花序に5~8花。花数が多くなると基部の小花序 1~2個は離れてつき、花序はやや総状。花冠は直径8~12mm、葯は長さ2~3mm、花柱は長さ4~6mm  
..... *S. douglasii* (= *S. nigrescens*) オオイヌホオズキ(仮称)
- E. 花序は散状に1~4花。花冠は直径4~6mm、葯は長さ1~1.5mm、花柱は長さ2~3mm  
..... *S. ptycanthum* アメリカイヌホオズキ
- D. 果実は直径4~7mm、黒紫色に熟し、強い光沢があり、果肉は早くから紫色になる。1つの果実中に種子は30~50個、球状顆粒は0~2個。種子は白色で直径約1.5mm (花序は5~12花がやや2列に並んだ散形。花冠は直径4~6mm、葯は長さ1~1.5mm、花柱は長さ2~3mm)  
.... *S. americanum* (= *S. photinocarpum*, *S. nodiflorum*) テリミノイヌホオズキ、カンザシイヌホオズキ



A: イヌホオズキ, B: オオイヌホオズキ, C: テリミノイヌホオズキ. 1: 花, 2: 雌しべ, 3: 雄しべ, 4: 果実期の花序. 花序と花のスケールは1cm, 雌しべと雄しべのスケールは1mm.

が *S. americanum* になっている。長田(保育社帰化植物図鑑)のアメリカイヌホオズキは *S. americanum* ではなく、*S. ptycanthum* で、北アメリカのロッキー山脈の東側に広く分布している種類である。テリミノイヌホオズキ(初出は *S. phtinocarpum* の原記載)が *S. americanum* で(保育社原色図鑑の見解と同じ)、北アメリカの南部~南アメリカに分布し、広く熱帯亜熱帯に広がっている種類である。おそらくカンザシイヌホオズキもこの中に含まれるものと思う。ただし、長田(保育社帰化植物図鑑)のテリミノイヌホオズキは、花が小さいことや果実の光沢が強いことでは *S. americanum* に思えるが、花序の形や種子

が小さい点では *S. douglasii* のようにも見える。両方の混ざった標本から絵や記述が描かれたか、あるいは別の分類群があるのかもしれない。

*S. douglasii* は花序をキーにして分けるとイヌホオズキ *S. nigrum* にされてしまう。果実が稔っていれば、種子が小さいことと、球状顆粒を含むことでイヌホオズキと区別できる。むしろ、花数が少ないと、*S. ptycanthum* との区別が微妙になりそうである。また、標本では果実の光沢がわからないので、花序の中軸の発達が悪いとテリミノイヌホオズキとの区別も微妙になる。*S. douglasii* には和名がないので、とりあえずオオイヌホオズキと仮称して整理しようと思う。

花冠の紫色のものがムラサキイヌホオズキであるが、テリミノイヌホオズキ、アメリカイヌホオズキ、*S. douglasii* のどの種も紫色花をつけるので、いずれをさしているのかわからない。

## 先人の標本をたずねて(2)

—ハーバリウムの標本調査から—

(高橋秀男)

本稿は本誌48号P.559-560から続くものである。

### 12. サウトウガラシ(ゴマノハグサ科)

相模三ツ沢(横浜市神奈川区) Sep.24.1911 牧野富太郎 MAK36712

### 13. クチナシグサ(ゴマノハグサ科)

武蔵稲田登戸(川崎市) Apr.26.1940 牧野富太郎 MAK79718

### 14. ウスユキムグラ(アカネ科)

箱根町 Aug.1915 牧野富太郎 MAK103042

### 15. ハマウツボ(ハマウツボ科)

平塚市平塚 May 21.1901. 牧野富太郎

MAK176545,176546 ほかに17点平塚の標本

相模山北深沢部落約400mの山中 Jun.24.1951

久内清孝 TI

相州横浜市 May 19.1914 原 寛 TI

相模平塚 May 1924 T.Yamamoto TI カワラヨモギに寄生

相模平塚 May 25.1930 Yuki Komori no.279 TI

相模平塚 Mar.22.1938 M.Togashi TI

相模平塚 May 25.1924 M.Honda TI

相模平塚 May 25.1930 初山 TI

平塚海岸 May 28.'23 服部静夫 TI

平塚 May 25.1930 S.Watri TI

相模大磯 Jul.4.1921 TI

15. シロハマウツボ

*Orobanche coerulescens* var. *albiflora* O.Kuntze  
相模平塚 May 29.1932 久内清孝 TI 「新称」

16. キヨスミウツボ

丹沢山頂上の小屋付近草の中 1400 m  
Aug.10.1950 T.Yamazaki TI

17. ハナハタザオ

平塚市 Aug.4.1985 牧野富太郎 MAK120114-  
120125 計12点(いずれも同産地, 同採集地,  
日付は異なっているものがある)

\* 調査したハーバリウムは東京大学総合研究博物館・  
東京大学理学部附属植物園(TI), 東京都立大学牧野  
標本館(MAK)である。このデータの一部は, 神奈川県  
RD調査報告書に発表したものも含まれている。

---

---

## 昭和9年に見た天神島の植物

— 赤星先生の記録から —

(高橋秀男)

古い資料を整理していたら, かつて県立博物館  
の囑託しておられた赤星直忠先生(横須賀市在住)  
から, 奥野花代子学芸員宛に送られてきた天神島  
の植物を記録した手紙が出てきた。この記録(書簡  
とリストの2頁になっている)は今とは全く様子  
の違う古い昭和9年の記録なので, 資料として  
紹介し, 「神奈川県植物誌2001」の参考にした  
いと思う。なお, 赤星直忠先生(1902-1991)は  
考古学者として多くの業績を残されている。また,  
松野重太郎先生は植物学者として知られ, 昭和8  
年発行の「神奈川県植物目録」の編集代表者であ  
る。以下, 不明の種も含まれているが原文のまま  
紹介する。

「天神島の植物メモを同封します。昭和9年に  
まだ天神島が遠くはなれていたころ, 神奈川県史  
蹟名称天然記念物調査員(現在の文化財保護審議  
会委員の前身)として植物担当の松野重太郎先生  
と昭和9年時の植物を踏査したものです。

戦後, 島の近接地まで埋め立てられ, 橋が出来  
て, 家が建てられたので, 島の植物相が全く変  
わってしまいました。或時期の調査し記録するこ  
とが大事なことだと考えて, やっておいたもので  
す。『神奈川県史蹟名称天然記念物調査報告書  
第三輯』(昭和10年3月)に松野先生が『天神島  
の植物群落』として調査結果をのせていますが,  
全目録は省略されているから, この目録はどこ  
にも残っていない大事な資料です。

天神島の植物 昭和9年, 松野重太郎先生と天  
神島にゆき記録した植物名(赤星直忠)

イヌビワ, イヌマキ, タブノキ, ツバキ, ツルマサ  
キ, トベラ, ハマゴウ, ヒロハマサキ, ヒメユズリ  
ハ, マサキ, マルバシヤリンバイ, モチノキ, ヤブ  
ツバキ, ユズリハ。(樹木14種)

アシタバ, イワダレソウ, オオバウマノスズク  
サ, オカヒジキ, ギョウギシバ, ケカモノハシ, コウ  
ボウムギ, コメツブウマゴヤシ, シホグサ, シホテ  
ンツキ, スカシユリ, ツワブキ, ツルナ, ハマボッ  
ス, ハマテンツキ, ハマヒエガエリ, ハチジョウナ,  
ハマダイコン, ハマアカザ, ハマエンドウ, ハマヒ  
ルガオ, ハチジョウススキ, ハマオモト, ハマゴ  
ウ, ハマゼリ, ハマニガナ, ハマボウ, ハマボウフ  
ウ, ハマエノコロ, フジナデシコ, ボタンボウフウ,  
マツナ, ヤクシワダン, ワダン。(草本34種)」

---

---

## 植物分類群とその語尾

(小原 敬)

本稿は植物を勉強し始めたばかりの方々のお  
役に立つのではないかと思います, 国際植物命名規  
約に従い作成してみました。

また, 『神奈川県植物誌1988』を見ると分類群  
の階級を格上げした場合, 日本語では語尾が直  
してあるのに, それに対応するラテン語の方は  
以前そのままになっていて, 新しい階級の語尾に  
直していない場合があるので, この植物誌の  
2001年版を作成するときの参考になればと思い  
書いてみた。

日本語	ラテン語	英語	語尾
門	divisio	division	-phyta
亜門	subdivisio	subdivision	-phytina
綱	classis	class	-opsida
亜綱	subclassis	subclass	-idea
目	ordo	order	-ales
亜目	subordo	suborder	-inae
科	familia	family	-aceae
亜科	subfamilia	subfamily	-oideae
連(族)	tribus	tribe	-eae
亜連	subtoribus	subtribe	-inae

註: 属以下の分類単位は省略してある。また, 菌類や  
藻類の場合には, 亜綱以上の階級では別の語尾を用  
いる。

## 宮ヶ瀬のヒメウラジロとナタネタビラコ

(高橋秀男・山口勇一)

### ヒメウラジロ(ホウライシダ科)の群生地

神奈川県植物誌調査会が発足してまもなくの1980年5月11日、合同調査で宮ヶ瀬から物見峠に向かう途中、長者屋敷キャンプ場を過ぎた林道で、1株のヒメウラジロを見出した。そのとき、筆者の一人高橋は写真を撮影した後に、1枚の葉を採集し、「神奈川県植物誌1988」の証拠標本にした。その後、ダム関連工事で宮ヶ瀬地区は大きく変貌してしまい、また、この山岳道路はオフロード車のドライブコースになっていて、ヒメウラジロは消滅したものだと思っていた。

山口は1999年10月10日、札掛方面からの帰路、好天で溪流釣りやドライブ客の車が多く、すれ違いに苦労させられていた。山側のわずかなスペースに車を寄せ、対向車をやり過ごしているとき、乾燥して反り返った葉裏が真っ白なシダが目に入った。すぐにそれがヒメウラジロ *Cheilanthes argentea* と分かるものであった。

後日訪れて確認したところ、540株が数えられ、さらに若い個体も多数確認することができた。この群生地は南面の高さ3 m弱、長さ約20 mの古い石垣で、風化の進んだコンクリート部分にイワデンダ

やクマワラビとともにへばりついて生育していた。ヒメウラジロの群生地が続く左右両側は岩の斜面と古い石垣とが交互に続いているが、この場所以外では全くその姿は見られなかった。

ヒメウラジロは乾燥した石灰岩質を好むことから、この石垣に繁茂したものであろうが、それにしても排気ガスとほこりにめげずにがんばっている姿に、ありがとうと言いたい気分になった。道路の拡幅工事が手前数百mまで迫ってきている。安住の地に指定し、末永く保護できないものだろうか。ナタネタビラコ(キク科)が宮ヶ瀬に帰化

宮ヶ瀬ビジターセンターから虹の大橋に向かって緩やかな峠を過ぎたところから橋の手前までの250 mくらいの法面は、両側とも高さ2 m程のコンクリートブロックの石垣が続いていて、その上面は奥行き1 mくらいの土面になっている。1999年6月27日、歩道を歩いていると、敷石の隙間に慣れぬキク科の植物が散見され、さらに歩を進めると、石垣の上にはヨモギやニガイチゴなどに混生して、大きいものは50 cmぐらい、数cm~30 cmの背丈で密生している部分もあった。向かいの法面にも群生した所が見られた。

採集して持ち帰って調べたが、種名が特定できず、新産の帰化植物かと考えていたが、後日、厚木植物会の同定会で、高橋の手に渡り調べることになった。その結果ナタネタビラコ

*Lapsana communis* であることがわかった。

長田「日本帰化植物図鑑」(1972)には、「1959年、神奈川県で採られ、採集例は少ない」とあり、今回の「植物誌2001」の調査では、川崎市高津区で採集されているのみである。

高さは40~50 cmになる中形の一年草で、茎は下部で枝分かれせず直立し、上部に円錐花序をつくる。下部の葉は頭大羽状に裂け、裂片は1~2対ある。5、6月頃に比較的長い花柄の先に、径1 cmほどのコオニタビラコに似た淡黄色の花を開く。一年草であるから法面の緑化や土留めに播種したものとは考えにくいだが、それらの種子に混じていたものであろう。それが道路の完成からおよそ20年を経て、まとまったナタネタビラコの群生地となって出現したのではないだろうか。

今後も引き続き、この種の消長を見守っていきたいと思っている。



ナタネタビラコ

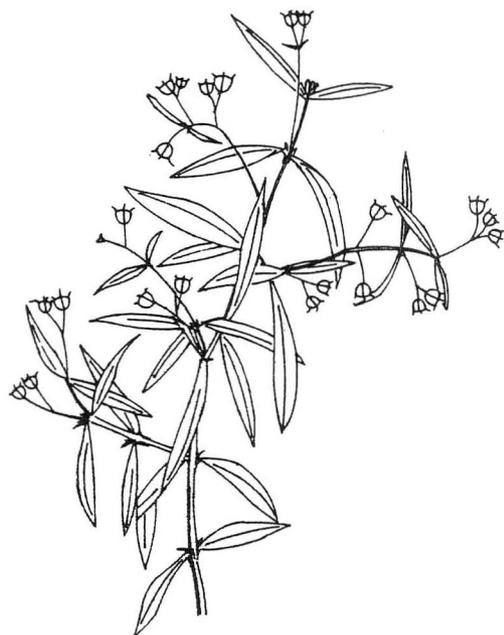
## 本州新産の帰化植物、タマザキフタバムグラ

(高橋秀男・林辰雄・金子紀子)

1999年10月9日、横浜市金沢区にある横浜市立金沢動物園の、ののほな館前の芝生で、一見ザクロソウに似た小さな植物を、筆者の一人金子紀子が見出した。生育していた場所は多くの人が通る道側で、芝生との境に置かれた横長のプランターのスグ近くであった。

名を調べようと図鑑類に当たって見たが、アカネ科のフタバムグラに似たもの、という見当はついたがそれ以上は進展せず、高橋の手に渡って調べることになった。高橋は神奈川県立博物館の文献類を見て、およその見当をつけてから、国立科学博物館に収蔵されている標本との比較検討を試みた。シンガポール、ラオス、タイ産の標本と比較した結果、アカネ科フタバムグラ属のタマザキフタバムグラ *Hedyotis corymbosa* (L.) Kamk. であることが明らかになった。

本種は熱帯、亜熱帯のアフリカ、アジア、中央アメリカなどに分布し、日本では沖縄に帰化し、すでに和名がつけられていたが、本州でははじめての記録のようである。生育地は畑、路傍などで、日当たりのよい、やや乾いた砂質の土壤に好んで生える。採集されたものは1個体のみで、生育地もその



タマザキフタバムグラ。

後攪乱されてしまい、翌年、発芽があるかどうかは明らかでない。一時的な帰化と考えられるが、今後の参考資料として標本を製作し、記録にとどめておくことにした。

以下に、採集した標本に基づき、形態の図を描き、国立科学博物館で参照した標本とあわせて簡単に外部形態を記す。

一年草。標本になると黒く変わる。茎は4稜があり、高さは10~30 cm、根元で枝を分け、斜めに立ち上がる。托葉は左右のものが合着し、頂部の縁は長さ1~2 mmの歯牙になる。葉は対生し、狭披針形で全縁、先端は鋭形~鋭尖形で、基部はしだいに狭くなり、柄はない。長さは15~32 mm、幅2~7 mm、中央脈は明瞭であるが、側脈は不明瞭であり、表面に微小な硬い毛があり、裏面は圧毛がある。花序は葉腋からでて、散房状に2~5個の花をつけるが、ときに単生もある。花柄は糸状で細く、長さ1~1.5 cm、小花柄は長さ1.5~2 mm。花は子房下位、長さ約2 mm。花冠は4裂し、花弁は白い。萼筒は細い鐘形、花が終わったあとはさく果を包み、大きくなって広鐘形、4裂した萼の先端が針状に尖る。さく果は幅2.5 mmほど。種子は小さく、褐色で稜角のある球形。

【標本】横浜市金沢区金沢動物園・ののほな館(金子紀子1999.10.9)既に花期が過ぎ、果実になっている。

この記録を執筆するに当たり、標本の閲覧を許され、種々ご便宜を与えて下さった国立科学博物館の近田文弘先生、ならびにご教示いただいた神奈川県立生命の星・地球博物館学芸員の勝山輝男先生に厚くお礼申し上げます。

### 参考文献

- 村松哲夫・一前宣正 1987. 世界の雑草 合弁花類 pp.333-334 全国農村教育協会  
台湾植物誌編輯委員会編著 1978. 台湾植物誌 Vol.4: 272  
島袋敬一編著 1997. 琉球列島維管束植物集覧 p.436. 九州大学出版会  
中国科学院北京植物研究所主編 1975. 中国高等植物図鑑 p.222. 科学出版社

---

---

## サガミメドハギ

(木場英久)

Nemoto & Ohashi(1999)は、平塚産のオオバメドハギ *Lespedeza davurica* (Laxm.) Schindl. とされ

ていた植物が、新種、サガミドハギ *L. hisauchii* T. Nemoto & H. Ohashi であることを報じ、神奈川県を基準産地とする植物が1種増えたことになるので紹介する。

オオバメドハギは、中国大陸などに広く分布する種であるが、これまで日本では、平塚市と群馬県前橋市から報告があった。前橋市の報告の元になった標本はカラメドハギ *L. juncea* (L.f.) Pers. の誤同定であり、平塚産のものは、小葉の上面に短屈毛が生えること、小花柄に多細胞の腺毛を持つこと、萼裂片が狭三角形で頂萼裂片の切れこみが萼裂片の長さの半分より短いことなどで、大陸のオオバメドハギや近縁なカラメドハギ、メドハギ *L. cuneata* (Dum.Cours.) G. Don と違いがあり、新種と判定された。同種の標本は東大、科博、都立大、台湾大に合計で6点あり、それらの産地は、平塚の他、葉山と東京都大田区鎌田であった。

ちなみに根本氏は、1998年3月に県博に来館し標本を見られているが、県博にも、平塚市博にも、横須賀市博にも、サガミドハギは無かったそうである。1933年の葉山以降の採集品が知られていないので、絶滅の可能性も考えられ、同報は「一刻も早い再発見が望まれる」としめくくっている。

#### 文献

Nemoto, T. & Ohashi H., 1999. A new species of *Lespedeza* (Leguminosae) from Japan. *J. Jpn. Bot.* 74: 268-281.

---

---

## ミヤマイラクサ

(菅澤桂子)

この春から相模原市に隣接する津久井郡城山町の丘陵地近辺を歩いています。相模原市の横山丘陵の西に続く地域です。この辺り、丘陵に沿って小道が続いて春にはイヌザクラの花が目立ちました。1999年7月中旬に久しぶりに訪れると樹木が日を遮り薄暗い林になっていました。斜面にはシケシダの類も見られ、それを観察をしていたとき、側にイラクサに似た植物が目に入りました。しかし葉身が丸く刺が有り、葉が互生についているのでイラクサとは異なります。この段階では種名を特定できませんでしたので、花が咲くまで待つことにしました。この間、いつ刈り取られるかと気が気では有りませんでした。観察のために残



ミヤマイラクサ (太田浄子氏撮影)。

しておいた植物が知らない間にきれいに刈り取られ、後で悔やんだことが、これまでに多々あったためです。

8月初旬に再度訪れ、周辺を見ると7株程が確認できました。刈り取られずに残っていたのです。それは、茎の上部からは数本の長く伸びた穂状花序(雌花序)が見られ、下の葉腋からは花序らしき物(未熟な雄花序)が出ていました。平凡社刊『日本の野生植物』により検索すると、葉身は丸く、刺が有り、葉は互生で長い穂状花序をつけることから、ムカゴイラクサ属ミヤマイラクサ *Laportea macrostachya* (Maxim.) Ohwi と同一であることが判りました。なお、長野県植物誌に掲載されていた雌花・雄花の詳細図との対比によっても同じ物であると判断しました。

生命の星・地球博物館の勝山氏にお忙しい中時間を割いて頂き、同定をお願いしましたところ、ミヤマイラクサであるとの確認を頂きました。

ムカゴイラクサ属にミヤマイラクサが有る事さえ知りませんでした。ミヤマイラクサは山地性の植物であるので、この平地に近い丘陵地で観察できたことは、この付近の生成過程に思いをはせることができ、今後の植物観察への取り組みに、よりいっそうの楽しみが湧いてくる思いです。

## 植物誌分布図集の訂正及びデータ チェックが必要な標本データ

(勝山輝男)

「神奈川県植物分布図集1999」がすでにお手許に届いていると思います※。分布図にしてみると、データのミスに気がつくものがあります。より正しい分布図を植物誌に掲載するために、誤りを見つけて訂正するのが、今回の分布図集の目的の一つです。すでに、事務局で把握できた分布図の誤りを以下に示します。この他にもまだ標本にはあたっていませんが、誤りの可能性があるデータがあります。誤データの可能性があるものについては、標本にあたって、コンピュータのデータを訂正する作業を行っています。採集を担当された方で、変だと思われる分布点がありましたら、事務局までお知らせください。

### (1)分布図集の訂正

P.37 トウゴクヘラオモダカの箱根の分布点が落ちている。県博にある古い標本のデータが未入力。

P.61 にジウロウスゲの分布図に海老名市の分布点が抜けている。古い標本が厚木高校に残されている。

P.61 ヤマオオイトスゲの横浜市栄区と南区の分布点は誤同定と判明したので削除。

P.63 ハコネイトスゲの横浜市戸塚区の分布点は持込みによるものなので削除。

P.66 クサスゲの葉山の分布点はクサスゲの東には標本がなく、すでに他種に訂正されたにもかかわらずデータ訂正がされていなかったものと推定される。標本の移動先は調査中。

P.72 ヒメホタルイの小田原(OD-4)の分布点は「HAK-2 芦ノ湖西岸」の3次メッシュデータの誤り。

P.78 クサスギカズラの小田原市入生田の分布点はキジカクシの誤同定なので削除。

P.80 ホソバアマナの分布点は駒ヶ岳1ヶ所のみ、湯河原よりの分布点は3次メッシュデータの入力ミスなので削除。

P.81 キヌガサソウの分布図はキヌガサギクの誤入力なので削除。

P.87 シロテンマの西丹沢の分布データが落ちている。FLORA KANAGAWAB (44)を参照。

※1999年6月時点で会費未納入の会員には、部数の関係上、分布図集をお送りしていません。その後、会費を納入されたのに、分布図集をお持ちでない方は、お手数ですが事務局までご連絡ください。

P.99 イチジクは栽培植物なので分布図は削除。

P.100 クサマオとアオカラムシは同一種なので分布図を1つにする。

P.101 ナガバヤマヤブソテツはP.20に移動。

P.103 カンアオイはカントウカンアオイ、オトメアオイ、ズソウカンアオイに分けていない古い標本のデータがそのままカンアオイとして出力されてしまった。この分布図は削除。

P.103 タマノカンアオイの藤野町内の分布点は県博収蔵の青葉区保木産標本の3次メッシュデータの入力ミスと判明したので削除。

P.121 ウスギオウレンの相模原市内の分布点は「YA-3 犬越路」のメッシュデータの誤入力であった。

P.128 オオバタネツケバナとヤマタネツケバナは同じもの。分布図を統合。

P.132 フジアカショウマの厚木市内の分布点は類似の園芸種と判明したので削除。

P.135 ハルユキノシタの三浦半島の分布点は栽培していたものなので削除。

P.135 ダイモンジソウの横浜市南部の分布点は植物誌1988でも「1株のみ野生状態、栽培の逸出」として取り扱ったもの。分布点は削除。

P.136 シモツケソウの横浜市旭区の分布点はシモツケの誤入力と判明したので削除。

P.137 にハイキジムシロ *Potentilla anglica* の分布図がないが、横浜市都筑区茅ヶ崎中央産の標本がある。

P.141 オオナワシロイチゴは植物誌1988で栽培とされたもの。分布図を削除。

P.145 タマザキフジはタマザキクサフジに和名変更。

P.149 タンキリマメの川崎市多摩区の分布点はトキリマメの誤同定なので削除。

P.154 オオバノキハダの川崎市宮前区内の分布点は誤同定と判明したので削除。

P.156 ホルトソウの分布図は栽培植物なので削除。

P.159 オオツルウメモドキの横浜市中区の分布点は誤同定なので削除。

P.161 モトゲイタヤとイトマキイタヤは同一種なので分布図を統合する。

P.161 コミネカエデの座間市の分布点は栽培によるものなので削除。

P.167 コオトギリの愛川町(AI)、山北町(YA-5)、厚木市(AT-4)の3分布点はクロテンコオトギリなので削除。

P.168 ヒメヤマスマミレの丹沢山の分布点はケマルバスマミレの誤同定なので削除。

P.174 イワアカバナの海老名市の分布点はアカバナの誤同定なので削除。

P.203 ハシロコロの箱根(HAK-4)の分布点はアオホオズキの誤同定、鎌倉市(KA-2)の分布点はハコベホオズキの誤入力なので、ともに削除。

P.207 ヤマクワガタはクワガタソウの誤同定なので分布図を削除

P.208 ヤマトラノオの箱根(HAK-4, HAK-1)の2分布点はヒメラノオなので削除

P.210 ジュズネノキはニセジュズネノキなので分布図を統合。

P.211 オククルマムグラの山北(YA-8)と大磯の2つの分布点はともにオオバノヤエムグラの誤同定なので削除。

P.219 アルクトテカ・カ…の和名はワタゲハナグルマに訂正。

P.226 ホソエノアザミの小田原市の海岸付近の分布点はタイアザミの誤同定なので削除。

P.226 イズハハコの分布図からYU-1 湯河原町の分布点が不正データのために落ちてしまった。

P.228 イワインチンの分布図は削除。

P.229 コゴメギクはハキダメギクの誤同定なので分布図を削除。

P.235 キントキヒゴタイの丹沢山付近の分布点は、標本データが「丹沢」とだけ書いてあるものを丹沢山の3次メッシュで表示してしまった。分布データとしては利用できないので分布点を削除。

P.237 オヤマボクチの横浜市旭区の分布点はハバヤマボクチの誤同定なので削除。保土ヶ谷区の分布点は若い個体であるが、オヤマボクチと思われるものなので残す。

(2)分布図集に出ている実体不明種

事務局が把握していない植物名で登録された標本がありました。標本を再検討する必要があります。

P.74 マムシグサは古い標本のデータで、マムシグサ類を細分しないままデータ入力したものと思います。カントウマムシグサ、ムラサキマムシグサ、ホソバテンナンショウなどの可能性があります。

P.106 オオハナタデ

P.116 ネバリシオツメクサはウシオハナツメクサのことでしょうか？

(3)次の種類は分布図が載せられていますが、これまで神奈川には分布していない種類、または過去に記録があるが、標本が確認できなかった種類

です。神奈川県新産または絶滅種の再発見となりますので慎重に取り扱う必要があります。データ誤入力、誤同定または栽培しているものを標準化した可能性も否定できませんので、標本を再確認したいと思います。

P.119 エンコウソウ, P.122 カラマツソウ, P.142 ナガバモミジイチゴ, P.151 ヤマフジ, P.153 オオヤマカタバミ, P.170 ナガバタチツボスミレ, P.167 イワオトギリ, P.168 ヒメオトギリ, P.171 ミヤマスミレ, P.184 サクラソウモドキ, P.190 コカモヅル, P.201 シソバツツナミソウ, P.201 コナミキ, P.210 クルマバソウ, P.221 イナカギク, P.221 ゴマナ, P.228 ヒゴタイ, P.228 ヨツバヒヨドリ

---

---

## 不正データの修正作業

(事務局)

「神奈川県植物分布図集1999」を作成するとき、7つの標本庫から集めたデータを合わせ、県外産標本のデータを除くと約21万件になりました。3次メッシュを用いて分布図を描いてみると、神奈川県からはみ出すような不正なデータが約1万件もありました。3次メッシュが空白のデータもかなりの数がありました。気づいた範囲で3次メッシュの不正を直したり、空白を埋める作業を行いましたが、残念ながら時間の制約で、今回の分布図集では、正しい3次メッシュを解明できなかったデータも多く、そういうデータを含む種では、不正データを省いて分布図を描き「他に3次メッシュ不正データを含む」という表示をしました。分布図集を見ていただけるとわかるとおり、ほとんどのページに「不正データを含む」の表示があります。また、その他にも県内に分布点が表示されているものの中にも、3次メッシュを間違えている場合が含まれています。

現在、その3次メッシュの校正作業をしています。合計で約21万件の標本データは、地名と地域メッシュと3次メッシュが重複する物を省いても、1万5千種類くらいがありました。それらの一つ一つを地図や他のデータと見比べて検討しました。1点の標本は21万分の1の存在ですが、誰かが標本を作り、名前を調べ、入力し…と多くの人の手がかかっていることを考えると、一つでも多くの標本データを救い上げたいと思います。

県内にたくさんあるような地名(たとえば、新宿、向原など)や、広範囲を示す地名(たとえば、横

浜, 相模川など)だけがあり, 地域メッシュコードが抜けている場合や, ただ「不明」とだけある場合には, もう調べる手立てが無いものとあきらめました。旧地名などで別名がある場合(たとえば, 鎌倉湖=鎌倉市・散在が池, ナズナ池=箱根町・お玉が池など)や, 細かい地名だけがある場合(たとえば, 鈴鹿(座間市), 駿河坂(横須賀), 箒ヶ鼻(箱根町))などにてこずりました。

これらの難物のなかには, 何冊もの地図をなめるように探してやっとわかるものもありました。古地図やバス停, 学校の名前などが手がかりになることが多くありました。この作業は, 地名に詳しい方や地元の方に聞けば, もっと簡単にわかるような場合もあると思われます。

そこで, 以下に3次メッシュが空白であった場合や, 3次メッシュが地域メッシュ外であった場合などのうち, 分かる望みのありそうなものを示しますので, 正しい3次メッシュや地域メッシュがおわかりの方は, 情報を事務局にお寄せくださいますようお願いいたします。

標本数	地名	地域メッシュ	採集者の例
1	丹沢コエド沢		
1	秦野市ミヅメ沢	HAT-4	金子順三
2	(神奈川県)中郡ミノ沢		
1	伊山神社		石川洋右
1	三浦市磯崎海岸	MIU	渡辺次雄
1	愛川町塩川台		逸見操
2	(神奈川県)鴨田		
2	(神奈川県)岸和田辺		中西準太郎
1	横浜市港北区鬼峠	KOH	出口長男
1	横浜市港北区久保木	KOH	出口長男
2	愛甲郡愛川町宮沢	AI	
1	川崎市多摩区宮添	TAM	歌川道子
1	相模原市橋戸	SA-1	八木馨
2	神奈川県武州穴守		島津製作所
2	(神奈川県)御野郡石村		
2	横須賀市甲府店		大谷 茂
2	(神奈川県)鴻ノ台		中西準太郎
1	丹沢佐宗寺		
2	津久井郡三栗山		金井登
2	神奈川県武州志村		島津製作所
10	伊勢原小金塚		逸見操
12	津久井郡小原		石田光治郎
8	逗子市小古瀬(オゴセ)	ZU	渡辺次雄
1	上宮田大芝原		鈴木一喜

1	上宮田大芝原		鈴木一喜
1	上宮田来福寺境内		
1	裏丹沢上野田		大谷茂人
2	相川村上落合(厚木市上落合)		
2	神古沢(厚木市神古沢)		
2	成瀬村(伊勢原市成瀬)		
1	茅ヶ崎市千村	CH-2	樋田五百枝
70	湯沢浅間山	YO-	渡辺次雄
1	大覚池畔	ZU	大谷茂
1	津久井郡相模湖町大口	SAG	
1	横浜市旭区大仙寺	AS	出口長男
1	大船中島バス停付近		
1	三浦郡葉山町大沢	HAY	渡辺次雄
1	横浜市瀬谷区大内	SE	鮎橋郁夫
2	(神奈川県)大野沢		
1	藤沢市中河原	FU-3	西尾和子
1	猪川林道		西尾和子
2	鳥屋大滝(神奈川県津久井町)		石田光治郎
1	鶴見川七垣		
2	鎌倉市天神橋～今泉		小林純子
2	湯河原中畑		飯田和
1	南台	ZU	大谷茂
1	葉山町馬の背谷		
3	伊勢原粕谷		逸見操
2	箱根榎ノ木		
2	神奈川県番雷地山		岩沢豊平
1	鎌倉市富士見町	KA-1	みちくさ会
2	鎌倉弥勒寺		加藤勝良
2	矢筈山		石渡宏
81	逗子市柚沢		初山泰一
1	葉山大池		初山泰一
1	鎌倉市和泉谷尾根	KA-1	渡辺次雄

## 2000年度総会のお知らせ

(事務局)

次の総会は, 2000年4月9日に相模原市博物館で開催します。詳しい日程等は追ってお知らせいたします。

## 編集後記

これまで本誌は, Macintosh 版のPagemakerでレイアウト作業を行ってきましたが, 植物誌2000はWindows版のPagemaker ver.6.5でレイアウトすることを計画しているので, 今号からはWindows版に移行しました。